

アブラハムの胤は小さい群れですか

今でこそ世界中にクリスチャンがいますが、元々というか、そもそも「クリスチャン」とはキリスト（油注がれた者）に与る者という意味で、またその目的で、存在するようになったワケですが、そのイエス・キリストはなぜユダヤ人だったのかという最も初歩的な質問ですが、多少なりとも聖書を学んだ人であれば「キリスト」つまり「メシア」はアブラハムの子孫から出るという神の約束に基づく取り決めであることを知っています。

*** 洞 - 1827 ページ 系図 ***

神はアブラハムの「胤」と呼ばれる者がイサクを通して来ることをアブラハムに啓示されました。（創 17:19; ロマ 9:7）ですから、その胤を見分けるには、系図に関する非常に注意深い記録が必要となることが明らかになりました。こうして、時たつうちに、指導権が約束された部族であるユダの家系（創 49:10）、そして特にダビデの家、つまり王統に関する事柄が入念に記録されることになりました。（サムニ 7:12 - 16）この記録がメシア、つまり胤の系図、すなわち並外れて重要な家系の系図となりました。

いわゆる「アブラハム契約」と呼ばれているものです。

（出エジプト記 19:3 - 6）…「これはあなたがヤコブの家に話し、イスラエルの子らに告げるべきことである。…もしわたしの声にくみ従い、わたしとの契約をほんとうに守るなら、あなた方はあらゆる民の中にあつて必ずわたしの特別な所有物となる。全地はわたしのものだからである。6『そしてあなた方は、わたしに対して祭司の王国、聖なる国民となる』。…「契約をほんとうに守るなら」という条件付きですが、元々、イスラエル国民全体が祭司となるつまり地から買い取る予定の人々であり、その主要な方がイエス・キリストであるということです。つまり本来キリストに与る「クリスチャン」となるはずだったのは文字通り生来のイスラエル人だけだったのです。

そのアブラハム契約とされた約束がなされたのはアブラハムがイサクを捧げようとした直後でした。

（創世記 22:17,18）…わたしは確かにあなたを祝福し、あなたの胤を確かに殖やして天の星のように、海辺の砂の粒のようにする。あなたの胤はその敵の門を手に入れるであろう。そして、あなたの胤によって地のすべての国の民は必ず自らを祝福するであろう。あなたがわたしの声に聞き従ったからである』。

ここから分かるようにその胤について人数の限定はありません。

むしろ、それは数え切れないほどの人々であることを強調しています。そうです。アブラハムの胤は「だれも数えつくすことのできない大群衆」と表現するのが一番的確でしょう。

ものみの塔の中にもそうしたコメントは幾度となくでてきます。

*** 塔 046/111 ページ 11 節 創造物は神の栄光を告げ知らせる ***

現代の望遠鏡で見ることのできる宇宙の星の数は、700 垓、つまり 7 の次に 0 が 22 個も付く数です。エホバはそれが膨大な数であることを示し、星の数を「海辺の砂の粒」と結びつけて描写されました。—創世記 22:17。

*** 塔 049/159 ページ「海の満ちあふれる富」***

その莫大な砂の量を見ると、聖書に出てくる「海辺の砂の粒」という表現がよく理解できます。これは、数え尽くせないもの、測りがたいものを指して用いられています。(創世記 22:17)

*** 洞 - 2836 ページ 星 ***

星の数 神は人間に話しかける際、星という語を、海辺の砂の粒と同じように、数え切れない数を表わすために用いられました。(創 22:17) 肉眼ではつきり見える星の数は数千個にすぎないので、かつてはその比較を見当違いとみなす人が少なくありませんでした。しかし今日、星の数は確かに地球全体のすべての砂粒の数にも匹敵することを証拠は示しています。

「胤を確かに増やして、天の星のよう、海辺の砂の粒のようにする」(新世界訳)

「あなたの子孫を天の星のよう、海辺の砂のよう、増やそう」(新共同訳)

「増やす」という言葉がなければ、星、砂のように、はっきりしない不確定の人数という意味にも取れなくはないかもしれませんが、しかし、この約束自体が、産まずめであったサラに約束によって得た独り子を捧げようとしたことに対応したものであり、「増やす」ということその数の量の多さこそが、この約束の本質的な部分です。

誰がどう読んでも、この表現は胤を星の数ほど、砂の数のように増やすという約束です。

この約束の時点では、神はそのための付加的な要素や条件などは何も語っておられません。ただ、アブラハムの子孫が無数に増えるということと、それが神からの祝福の経路となるというものでした。

そういうわけで、文字通りアブラハムの子孫はみなその契約下にある胤となる予定でした。

ただし、それには一つの条件があることが、後に明らかにされました。冒頭に引用した出エジプト記にあるように「契約に忠実」であることが必要でした。

つまりその子孫つまり胤は、アブラハムの血の遺伝子だけでなくその特質、信仰や忠節といったものを受け継いでいる者こそ「本当のアブラハムの胤」であるということです。

そのため、結果的にアブラハム契約に関連したある変化が生じました。人種的にまったく異なった人々にもその道が開かれたのです。パウロはこう表現しています。

(ローマ 11:11) …彼らの踏み外しによって諸国の人たちに救いがあるのであり…

(ガラテア 3:28 - 29) …ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男性も女性もありません。あなた方は皆キリスト・イエスと結ばれて一人の[人]となっているからです。

29さらに、キリストに属しているのであれば、あなた方はまさにアブラハムの胤であり、約束に関連した相続人です…

この変更は、忠実なイスラエル人（クリスチャンとなったユダヤ人）だけでは、当初の目的を果たすことができなくなったことによります。

つまりその唯一の理由はすなわち、数が足りないからです。彼らだけで数が足りていればその必要はなかったのです。

はっきり言ってその数が 14 万 4 千人いれば良いのなら、異邦人がクリスチャンになることなど、初めから必要なかったのです。

しかし、神の目的にかなう「祭司の王国、聖なる国民」という星や砂ほどもいる一団を満たすために、西暦 1 世紀以降「補充」のための期間が設けられました。2000 年もの長い期間です。正に「すべての国民と部族と民と国語の中から来た、だれも数えつくすことのできない大群衆」が必要だったのです。

*** 塔 02 12 / 1 29 ページ 読者からの質問 ***

アブラハムの「胤」は、イエス・キリストを別にして 14 万 4,000 人であることが最終的に明らかにされ、イエスはそれを「小さな群れ」と呼びました。

さて、「14 万 4,000 人」について言えばそれは「証印を押された」「わたしたちの神の奴隷たち」「初穂」「新しい歌を歌っている」「子羊とシオンの山に立っている」人の人数として記されているだけで、それ以外のことは明らかにされていません。

それが「アブラハムの胤の全員」であることを示すものは聖書中のどこを見ても「最終的に明らかに」されていません。

「小さな群れ」という表現はたった一カ所ルカ 12 : 32 に「恐れることはありません、小さな群れよ」と出てるのみで、それは 12 人の弟子たちのことで、それ以外の比喩的、象徴的な意味があることを示唆する記述は聖書中のどこにもありません。確かに 12 弟子は「アブラハムの胤」でしたから、目の前の 12 人のアブラハムの胤を「小さな群れ」と呼ばれましたが、「アブラハムの胤」そのものが「小さい」グループであるなどとはどこにもかかれていません。イエスが 14 万 4000 人を「小さな群れ」と読んだことは一度もありません。

確かに「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ないのです」。(マタイ 22:14) とありますが、この少ないというのは、招かれた者との相対的な表現です。1 / 10 (10 分の 1) であれ 1 / 100、1 / 1000 であれ、その「分の 1」の絶対数が必要とされるが故にさらに圧倒的な数の人に招待が出される、つまり全人類に向けて招待がなされているのです。「星や砂」は漠然とした表現ですが、相対数ではなく絶対数なのです。

一体どういう読み方をすると「星のように、砂のように増やす」という約束が最終的に、絶対数として「小さい群れ」で成就するということになってしまうのでしょうか。もし本当にそうならば、アブラハムに対する神の約束は「ウソ」だったと言うことになります。